

中世の鍋釜

鑄鉄製煮炊用具の名称

Medieval Japanese Pots and Kettles: Temporal and Spatial Variations in their Names

五十川伸矢

- ①はじめに
- ②中世の鑄鉄製煮炊具の変遷と地域性
- ③古辞書にあらわれた鍋釜
 - ④鍋釜の鑄物資料
 - ⑤描かれた鍋釜
 - ⑥おわりに

【論文要旨】

古辞書にあらわれた鍋釜関係の語彙や鑄物資料に付された銘文、絵画資料などを検討して、鍋釜の名称の歴史的な変遷や地方的な呼称名の存在などを推論する。

古辞書を見ると、12世紀中葉～13世紀前葉ごろには、「釜」も「鍋」も「かなへ」と呼ぶ場合があった。「かなへ」は煮炊具の総称でもあり、個別の器を呼ぶ時にも使われたと推定できる。鎌倉時代の後半になると、「釜」は「かま」（羽釜）、「鍋」は「なべ」（鍋A）と読む原則が確立し、「かなへ」に「鼎」という字があてられはじめた。15世紀には、「釜」と「鍋」のほかに、「弦鍋」という名称が出現し、鍋Bが一般に広く普及したことを示す。また、「鑊子」や「煎盤」、「葉鑊」など、それまでの時代には明確でなかった器種の煮炊具も顕在化してきた。こうして成立した器種は、その後の伝統的な煮炊具の基本となったと考えられる。そのなかで、「かなへ」は、実用的な器種を指す名称ではなく、特殊な神器や古器などを呼ぶ名称になっていった。

鑄物資料の羽釜形のもの、三足の有無を問わず、中世以降銘文には「釜」という字があてられている。一方、鍋形のものにも、「釜」と表記されているものがあるが、その古いものは、「釜」と「鍋」という字がともに「かなへ」と呼ばれた時代の所産である。その後のものに関して、鍋釜の器名と形態について絵入り百科事典や鑄物師の型録などの絵画資料を検討すると、近畿地方を中心とする鍋釜地域では、鍋Aは「鍋」と記されているが、それ以外の鍋地域では「釜」と記載されているところがあることが判明した。これは、中世の鍋Aや鍋Cが地域によっては「釜」と呼ばれていた可能性を示すものではないかと考える。